日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員
上野　正博

ビーチコーミング

10月半ばのある日、私は東大博物館のSさんと神崎の海岸へ。貝の専門家のSさんが舞鶴周辺にどんな貝がいるかを調べる調査の案内役です。船での調査の下見もかねて海岸に打ち上げられた貝殻を集めてみようというのです。髪を櫛（コーム）ですくように海岸の漂着物をくまなく探すビーチコーミングというわけです。

ビーチコーミングは愛好家が多く、その全国大会の漂着物学会が京丹後市の琴引き浜で先日、開かれたばかり。海岸に漂着した変わったものなら何でも拾う方もいれば、貝殻だけ、漁具の浮きだけなどと的を絞っている方など示しているそうなので、興味のある方は是非おたずね下さい。ただし、予約が必要です。

さて、神崎の浜に着いてSさんと私はしばし呆然。大量のゴミが浜の真ん中に土手を作っています。高いところは1メートルを超える高さ。近づいてよく見るとほとんどがススキやアシの切れっ端です。河川敷などの草刈りをした後に回収されずに残ったものが台風の大雨で流れ出したようです。由良川の全長は150キロ。それぞれの場所に残っていたのはわずかでも、ちりも積もれば山となるってヤツでしょう。

一昔前ならこんなゴミは適当に燃やしてしまえば良かったのですが、海水に濡れた物を燃やすとダイオキシンが発生することが分かってからはそうもいきません。おまけにお定まりのペットボトルなどのプラスチック製品が混ざっているので、なおのこと。

肝心の貝殻集めは、太平洋側の河口域ではほとんどいなくなってしまった貝がいくつも見つかり、Sさんはご満悦。こんな貝が沢山いるってことは、由良川も神崎浜地先の海もかなり良い環境が残されてるんでしょうねと感心することしきり。でも、せっかくほめていただいてるのにゴミの山の前ではね。

ビーチコーミングは愛好家にはボランティアの海岸清掃がきっかけって方も多いようです。使い捨てライターの収集も「いったいどこの阿保がこんなに捨てるンや」という義憤がきっかけとか。琴引き浜にある「鳴き砂文化館」では、琴引き浜へ漂着した物を椰子の実などのロマン系と使い捨てライターなどの非ロマン系に分けて展など。中には使い捨てライターだけを捜すっていう変わった方もいます。

神崎の浜に流れついた大量のゴミ